

農林水産大臣賞受賞

400年の歴史を伝えるむらづくり

なかつがわくこうみんかん
受賞者 中津川区公民館

(鹿児島県薩摩郡さつま町)

■ 地域の沿革と概要

鹿児島県の北西部に位置するさつま町は、平成17年に薩摩町、宮之城町及び鶴田町が合併して誕生した町で、南九州一の大河「川内川」が貫流しており、森林、竹林、温泉、伝統文化やホテル等の豊かな地域資源に恵まれている。

中津川区公民館（以下「区公民館」という。）のある中津川地区はさつま町の東部に位置し、昭和24年からの5年間は中津川村だった地域で、5集落で構成されている。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

本地区では、織田・豊臣時代にこの地域一帯を治めていた島津金吾左衛門尉歳久公を住民が「金吾さあ（様）」と慕い、歳久公を祀る「大石神社」の秋季大祭には、地区の5集落がそれぞれに踊りを奉納し続けており、大石神社をとおして集落や地区のまとまりをもつ地域である。

本地区の農業は、川内川の支流が天然の用水路として水田を潤し、風水害の被害を受けにくい恵まれた地形にあることで数百年前から水稻の適作地として集落による水路・畦管理等に取り組みながら米の産地を確立してきた。

第1表 地区の概要

| 事項 | 内容 |
|----------------|---|
| 地区の規模 | 集落5 |
| 地区の性格 | 地縁的集団 |
| 農家率 (内訳) | 52.9% 総世帯数 439戸 総農家数 191戸 |
| 専業別農家数 (内訳) | 専業農家 63戸 1種兼業農家 29戸 2種兼業農家 70戸 |
| 農用地の状況 (内訳) | 総土地面積 18km ² 耕地面積 310ha 田 230ha 畑 80ha 耕地率 17.2% 農家一戸当たりの耕地面積 1.6ha |

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機・背景

ア 消滅の危機に直面した「大念仏踊り」

大石神社に奉納される「金吾様踊り」には、毎年、秋季大祭で各集落

等から奉納される踊りのほか、日照り続きの際の雨乞いや水田害虫の発生防止の立願を行うため、数十年に1度奉納されていた「大念仏踊り」がある。

「南無阿弥陀仏」の高唱から始まる単調な行列と、各集落から選び抜かれた踊り手による舞とが掛け合わさった「大念仏踊り」は、県内の民俗芸能の中でとりわけ規模が大きく、昭和30年の奉納時には県内から約4,000人の観客が詰めかけたと言われている。ただ、住民の誇りである「大念仏踊り」は、昭和30年の奉納を最後に途絶え、消滅の危機に直面していた。秋季大祭も平成初期になると、観客数と踊り手が同人数というほどに観客数が減少し、かつての賑わいが薄れつつあった。



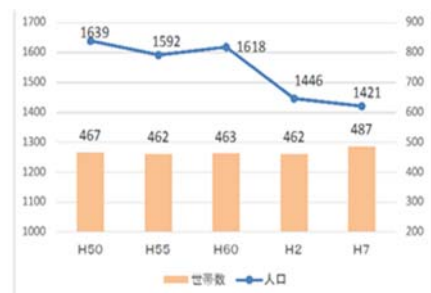
写真1 消滅の危機に直面した「大念仏踊り」

昭和30年の奉納時には県内から約4,000人の観客が詰めかけたと言われている。ただ、住民の誇りである「大念仏踊り」は、昭和30年の奉納を最後に途絶え、消滅の危機に直面していた。秋季大祭も平成初期になると、観客数と踊り手が同人数というほどに観客数が減少し、かつての賑わいが薄れつつあった。

イ 住民総参加のむらづくり計画の策定

昭和60年当時の中津川地区は人口1,618人だったが、その5年後の平成2年には、1,446人(89%)にまで減少し、中津川地区の将来について不安を抱く住民が多くなってきた。そのため、区公民館が中心となって住民総参加の話し合いに取り組み、6年に「中津川地区地域づくり活性化計画」を策定した。策定に際し、本地区の将来を語る中で住民からあがったのは、大石神社の『金吾様踊り』に賑わいを取り戻したい、長年の懸案である「金吾様踊り」の一つ『大念仏踊り』を復活させたい」という声であり、話し合いを重ね、農業面だけでなく、農村文化の継承を含めた計画ができあがった。

第2図 人口・世帯数の推移

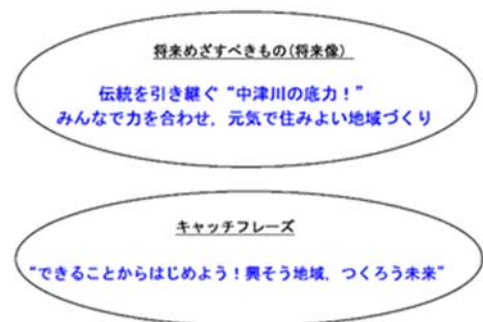


(2) むらづくりの推進体制

ア 中津川区公民館

区公民館は、区公民館長及び5公民会(各集落)の代表が運営や各種行事の企画・調整の中核となっている。また、各集落から人選し、総務部、体育部、福祉部、文化部及び産業経済部の5専門部会で構成し、各専門部長及び各公民会長交えた役員会により、各種事業計画や実施に向けた詳細を検討している。平成22年には住民へのアンケート調査を実施し、23年には農業分野のほかに、福祉、環境整備、商工業及び観光等の分野を含めた

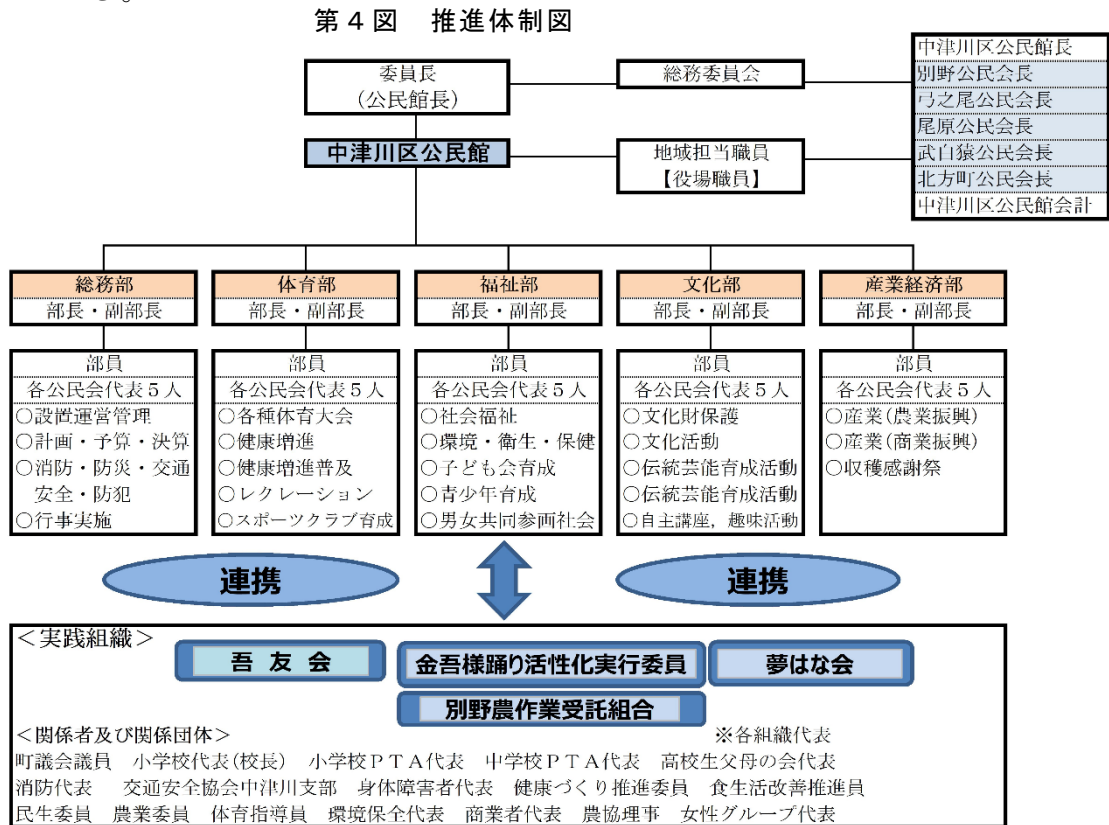
第3図 地域づくり活性化計画の将来像等



むらづくりの方向性を定めた「中津川地区地域づくり活性化計画」を策定した。また、27年度には計画の見直しを行い、地域の将来像や目標の実現に向けた取組を実践中である。

イ 区公民館との連携組織（実践組織）

区公民館と連携し実践活動を展開する組織として、金吾様踊り活性化実行委員会、吾友会及び夢はな会等がそれぞれの目的をもって組織されている。



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本地区では、区公民館を中心として住民総参加の話し合いを進め、「大念仏踊り」の復活などを住民の総意として盛り込んだ「地域づくり活性化計画」を策定し、農業者団体、青年・女性グループ等と連携を図りながら実践活動を行っている。このことで、住民が地域への誇りと愛着心を蘇らせ、若者の地域への定着やUターン者の増加、地域の活性化や農業振興につながり、世代間の絆を強めている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 鹿児島県の普通期水稻を支える種籾生産

本地区は、昭和30年に鹿児島県の種子生産、45年には普通期水稻の採種地の指定地域となった。45年に設立された「中津川採種生産組合」は、半世紀にわたり県内の普通期水稻の種籾全てを生産・供給している。

全国的には1産地1品種に絞る種籾産地が多い中、本地区では8品種もの種籾の生産を担っており、組合員は責任感と誇りをもち、組合員総意による管理を行っている。このため、発芽勢の高い優良種子生産に向けて、一生産者一品種体制の徹底による育苗時の混種防止、ほ場での異茎株の抜き取りなど異品種の混入防止に細心の注意を払いながら、基本技術を徹底し、平成29年度は組合員32人が水田78haで種籾を生産し、1.1億円（水稲全体の48%）の生産額を上げている。

（2）肉用牛女性組織「牛々さつまおごじよの会」の結成

畜産経営農家も多い本地区では、近年経営を始めた女性農業者もおり、「もっと良い牛を生産するために、女性が集い、学ぶ機会が欲しい」という声が聞かれていた。そこで平成29年、地区の肉用牛農家女性リーダーが中心となり、近隣地域の肉用牛農家女性とともに13名で「牛々さつまおごじよの会」を発足させた。



写真2 肉用牛の栄養管理等について学ぶ

これまで、体系立てて畜産技術を学ぶ機会がなかった女性たちが、繁殖技術、子牛育成管理などの基本技術を学んだり、新規就農者や若手肉用牛農家との合同研修会の開催など経営に関する資質を高めるとともに、女性農業者が相互に経営や家庭の悩みを語り合うなど、組織が交流や情報交換の場となっている。

（3）農業生産を継続する体制づくり

本地区における農業就業人口の65歳以上の割合が68.8%（平成22年農林業センサス）となり、将来の農業の担い手や農地の維持などに不安を抱えるなか、地区内の別野集落では、23年に別野農作業受託組合を設立した。高齢農家等からの依頼を受け、田植えや稲刈りなどの農作業を請け負っており、29年度には集落の水田の約半分の11haを受託している。さらに、農家や自営業等の青年が25年に結成した「吾友会」は、地区内で人手が不足している農作業、水路清掃、草刈りなどの作業を支援している。

（4）「なかっこ日曜朝市」を拠点とした直売・交流活動

「大念仏踊り」の復活がきっかけとなり、地域の子どもから高齢者まで一同に集まる機会を作り、地域内外の交流を図りたいと、産業経済部を中心に平成23年から月1回、野菜や加工品を直売する「なかっこ朝市」に取り組んでいる。



写真3 賑わう「なかっこ朝市」

地域の間伐材などで手作りの常設施設を

建設し、住民に対して出品呼びかけのチラシを配布し、参加を促している。平日は無人販売所として開設され、高齢農家等の収入確保や生きがいくりとともに、地域の高齢者が集うサロンの役割も果たしている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 「大念仏踊り」復活に向けて青壮年層が結束

本地区の活性化のために「大念仏踊り」の復活を図ろうと集った青壮年は、昭和30年当時の踊り手であった各集落の高齢者に相談したところ、半世紀も前の踊りの詳細は記憶が不鮮明で、復活は厳しいと難色を示された。

また、30年には多額の準備金を使い、全世帯から総勢500人のキャストを要したと言われる「大念仏踊り」は、資金集めと人集めが必要で、地域の心を一つにして取り組むことが不可欠であった。そこで、各集落から集まった青壮年の有志11人で平成15年、「金吾様踊り活性化実行委員会（以下「実行委員会」という。）を結成した。中津川の無形文化財を後世に引き継がなければという強い思いで当時の踊り手に何度も足を運び、ようやく協力を得られるようになり、踊りの「いわれ」を聞きながら振り付けの練習が始まった。

(2) 「大念仏踊り」の復活と地域の結束

「実行委員会」が活動を始めて7年後の平成22年、大石神社秋季大祭で48番ある

「大念仏踊り」の一つである「じわりまい地割舞」の復活が実現した。55年ぶりの「地割舞」は、中津川住民としての誇りも復活させ、15年には100人だった観客数は22年には1,400人にまで増加・回復した。

この間、大石神社の環境整備や社務所の建設など地域総ぐるみで取り組むとともに、秋季大祭当日は産業経済部を中心に地元の農産物や手作り加工品等の販売を行うなど、踊りを見に来る地域外の観客を意識した取組を行うようになった。

平成28年には61年ぶりに「ちごまい稚児舞」が復活。30年度は難易度の高い「ぼううちまい棒打舞」の復活に向け、住民一丸となって練習や道具等の製作に取り組んでいる。衣装や道具、ポスター製作等はそれぞれ得意とする住民や地区出身者からの協力を得るとともに、「金吾様踊り」の賛同者には名入れした幟を1本2,500円で販売しており、皆が大祭に参加している雰囲気を作り出している。

第5図 金吾様踊りの観客数の推移



写真4 55年振り復活「地割舞」

(3) オリジナル焼酎「金吾さあ」の商品化による継承活動の財源づくり

「実行委員会」が地域に働きかけ、平成 19 年から地区内の遊休農地を利用してさつまいもを栽培し、独自の焼酎「金吾さあ」を製造・販売している。植付、収穫は保育園や子ども会と一緒にいき、町内の酒造会社に委託し、焼酎「金吾さあ」1,000 本を製造、さつまいも町内の 5 店舗で販売している。1 本 2,400 円で販売される焼酎「金吾さあ」のうち 200 円は「金吾様踊り」の協力金として自主財源としている。焼酎「金吾さあ」は平成 21 年に商標登録され、28 年からは町のふるさと納税の返戻品としても活用されるなど地域の特産品となっている。



写真 5 住民総出で焼酎用いもを植付

第 2 表 さつまいも栽培、販売実績

| 年 度 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
|------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| さつまいも栽培面積 (単位:a) | 40 | 20 | 30 | 20 | 20 | 15 | 15 | 20 | 20 |
| 販売金額 (単位:千円) | 595 | 234 | 377 | 265 | 222 | 151 | 173 | 361 | 292 |

(4) 地域を担う青壮年の結集と活動

「実行委員会」のメンバーが、「過疎が進む地域を何とか盛り上げたい」と平成 25 年に「吾友会」を結成した。農家、自営業等からなる 20 人で、「金吾様踊り」の担い手、中津川交流館の清掃、校区案内看板製作、小学校との交流活動、オリジナル焼酎の製造を委託している酒造会社のイベント支援、世代間交流事業の企画運営、町が主催する婚活イベントへの参画等に取り組んでいる。



写真 6 むらづくりを担う若手グループ「吾友会」

本地区では、「地域づくり活性化計画」を策定した平成 6 年から 30 年までに、世帯主が 20～30 歳代の U ターン移住者が 12 世帯・44 人になっている。I ターン移住も含めれば 18 世帯・67 人になっている。吾友会が結成された 26 年以降も同世代の 6 世帯が U ターンし、5 人が加入している。

(5) 地域を担う女性の結集と活動

「吾友会」の結成と同じ頃、地域の女性が気軽に学び交流できる場を作ろうと、平成 21 年、地区内の女性の有志 14 人で「夢はな会」を結成した。会員は、特産品開発等の先進事例研修の実施や毎年 11 月に行われる区の収穫感謝祭等で、手作り加工品の振る舞い、地域農産物の新たな食べ方の研究などに取り組むとともに、地区の運営委員として地域の方針決定の場に参画し、地域の活性化に貢献している。

(6) 地域ぐるみの高齢者見守り活動

地区内では 79 戸が独居老人世帯となっており、他出した出身者から安否確認の相談もあった。そこで、独居老人が「元気」であれば玄関先に黄色い旗を立てる「安否確認」の取組を開始した。高齢者が毎朝外に出て旗を立てるといふ取組により、近隣住民や通学途中の子どもたちと会話をする機会が増えるなど、地域ぐるみで高齢者を見守る体制が図られつつある。